

小泉信三による「塾生出陣」の描写

『海軍主計大尉小泉信吉』より

十月の或る日学生の徴集猶予停止が発表された（理工科学生は姑らく入営延期）。学生は待つてゐたやうに此決定を迎へた。学生等は、学生としての彼等に残された数十日の日々を惜み、却て平常の日よりも勤勉に登塾して、課業に精励するやうに見えた。三田の山上では、校庭の此処彼処に、やがて出て征く学生等が、特に親しい者同志、五人十人群をなして芝生の上で語り合ひ、また、よく仲間同志で記念写真を撮り合つてゐる景色が見られた。偶々そこへ行き合せて、一緒に入つてくれと頼まれ、カメラの前に立たされたことも幾度となくあつた。

又私は、出て征く学生に頼まれ、日々国旗に揮毫した。秘書の川久保君は、塾長室の隣の会議室の細長い卓の上に、依頼の順に従つて国旗を並べて置いて墨を磨る。私は卓に沿ふて自ら動きつゝ出陣者の氏名、私の自署、激動の文句の数字を片端から書いて片付けて行く。給仕の少年は硯を持つて、卓の向ふ側を私について歩く。その間に川久保君はまた新しい国旗を並べる。自動車の運転手栗山は、受付の代理を勤め、揮毫がすんで、糸を渡しているは順にそれを懸け吊るして置いた中から請求者の分をさがし出してやつたりする。斯ういふ事を幾日、幾時間繰り返したか。兎に角揮毫した国旗の数は千以上になつたであらう。

やがて入営入団の日が近づいたので、塾では十一月二十日、大講堂で戦没塾員慰霊祭を営み、二十二日には稲荷山の下に臨時に設けた大会場で、壮行会を行った。式が済んでから、塾生等は大講堂の前の広場に、送る者と送られる者と相対して整列し、塾の様々の歌を歌ひ、また、肩を組み、前後左右に波のやうに揺れ動きつゝ、対校試合に勝つた時の歓喜を歌ふ歌を合唱した。それが終つて、塾生は四列縦隊を作つて坂を降りて行つた。私は教職員の人々と共に正門の傍でそれを見送つた。門を出た塾生等は、三田通り、寺町、白金台町と行進して福澤先生の墓参をした。私は門で最後の塾生を見送つてから更に自動車で行進の跡を追ひ、大崎の常光寺の先生の墓の前で再び多くの塾生と会つて別れの挨拶をした。それを終へて午過ぎ塾へ還つて来た。数時間前の熱情的な光景に引きかへ、校庭は空しく広く、人影は疎らであつた。墓参を終へた学生の中には、なごりを惜んで、また山の上に帰つて来たものもある。今別れて来た許りの其の学生等に会ふことが、遠い旅から帰つて来た人々と再会したやうに懐しく思はれた。